

豊中市所在

蛍池遺跡 02-1

都市計画道路蛍池西側線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

大阪府豊中市の北部、阪急電鉄宝塚線蛍池駅周辺では近年モノレール建設事業、あるいは駅前再開発事業が大規模に実施され、その景観は過日の面影をほとんど留めないまでに大きな変貌をとげつつあります。

さてその蛍池駅を中心とする台地上には、蛍池遺跡をはじめとした諸遺跡の存在が従来から知られており、上記事業に伴う調査が10年余にわたって継続的に進められてきました。その結果、遺跡の初源がはるか旧石器時代に遡ること、古墳時代中期には畿内政権との関係をも想定しうる大規模な掘立柱建物群が突如として出現すること、あるいはそれらの廃絶後、奈良時代に至るまでほぼ継続的に集落として利用されたことなどが次々と判明し、多大な成果を収めつつあります。また1999～2002年度の麻田藩陣屋跡の調査において近世大名の家老屋敷の実態が解明されたことは記憶に新しいところです。蛍池の台地の上で、時代を越え、階層を違えながら、多くの人々が生活の拠点を構え続けてきたことは、もはや疑う余地がありません。

今回の調査地は蛍池遺跡の南端、台地をくだったところで、御神山古墳（古墳時代前期）に隣接しています。

調査の結果、中世の溝を検出するとともに古墳時代後期の埴輪片と奈良時代の平瓦片が出土するなど、一定の調査成果を挙げることができました。その詳細は本書で報告するところです。

調査に際しましては大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府茨木土木事務所あるいは地元関係各位に多大なご指導・ご協力をいただきました。記して感謝の意を表するとともに、今後とも当センターの事業に一層のご支援を賜るようお願いする次第です。

2003年10月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府豊中市蛍池中町1丁目に所在する蛍池遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、大阪府茨木土木事務所から財団法人大阪府文化財センターが2003年1月31日から2003年10月31日の間委託を受け、2003年2月7日から同年7月31日にかけて現地調査を、引続き2003年8月1日から同年10月31日にかけて整理作業を実施し、本書の刊行をもってすべてを完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

調査部長玉井 功、北部調査事務所長小野久隆、調査第1係長森屋美佐子、技師信田真美世、非常勤専門調査員正岡大実（2002年度）

調査部長玉井 功、中部調査事務所長小野久隆、調査第1係長辻本 武、主査片山彰一〔写真〕、技師駒井正明、非常勤専門調査員永井（小澤）晃子（2003年度）

調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、主査山上 弘、技師山元 建
4. 調査・整理にあたっては、次の方々よりご教示・ご協力を賜った（敬称略、五十音順）。

赤松和佳（大手前大学）、有井宏子（大阪府教育委員会）、橋田正徳・清水 篤（豊中市教育委員会）
5. 調査・整理作業には、高田泰子・樋口玲子・山本香織が参加した。
6. 本書の作成にあたっては各担当者がそれぞれ寄稿、執筆分担は下記に記す通りである。

第1章 辻本 第2章 永井 第3章 駒井・永井 第4章 駒井
7. 本書の編集は駒井が担当した。
8. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高はT.P.+で、長さはmで表現した。
2. 遺構平面図に用いた国土座標は、世界測地系で表示した。
3. 遺構平面図に付す方位針は座標北である。
4. 現地調査や遺物整理は、『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』 通商産業省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 の最新版を使用した。
6. 遺構は発見順に付した連番と、遺構名称で表現する。
7. 遺物実測図はすべて4分の1で、また写真図版の遺物のうち3・4は約2分の1で、それ以外は約3分の1で掲載した。

目 次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 環境	2
第3章 調査成果	6
第1節 調査の方法	
第2節 基本層序	
第3節 遺構	
第4節 遺物	
第4章 まとめ	10

挿図目次

図1 調査位置図
図2 等高線図
図3 遺跡分布図
図4 調査区割図
図5 土層断面図
図6 遺構配置図
図7 出土遺物実測図

写真図版目次

図版1 調査区全景
図版2 出土遺物

第1章 調査にいたる経過

1982年度に都市計画道路大阪モノレール整備事業が阪急蛸池駅周辺で予定されたのに伴い、1989年に大阪府教育委員会による一部の発掘調査、1990～1991年度に豊中市教育委員会による試掘調査が実施された。その際事業予定地のほぼ全域で遺構・遺物が検出されたことから、大阪府教育委員会は全面的な調査が必要と判断した。(財)大阪文化財センターはこの判断に基づき、大阪府教育委員会の指導のもと1992・1993年度および1995年度に発掘調査を実施し、古墳時代大形掘立柱建物群や密集土坑群を発見するなど、多大な成果をあげた。

南門前池は同事業の対象となったところで、当初は遺跡外であった。しかし、1993年度モノレール橋脚部分建設に伴う調査で奈良時代の遺構を検出し、遺跡の範囲が広がったのである。この成果に基づき、今回は側道である大阪モノレール蛸池西側線がこの池内で建設されるに先立って調査を実施した。

(財)大阪府文化財センターは、これまでと同様に大阪府教育委員会の指導のもと、茨木土木事務所大阪モノレール事業所の委託を受けて2003年2月より着手し、同年5～7月に現地における発掘調査作業を実施した後、引き続き内業整理作業をおこなった。これによって蛸池駅周辺におけるモノレール事業に伴う遺跡調査はすべて完了した。

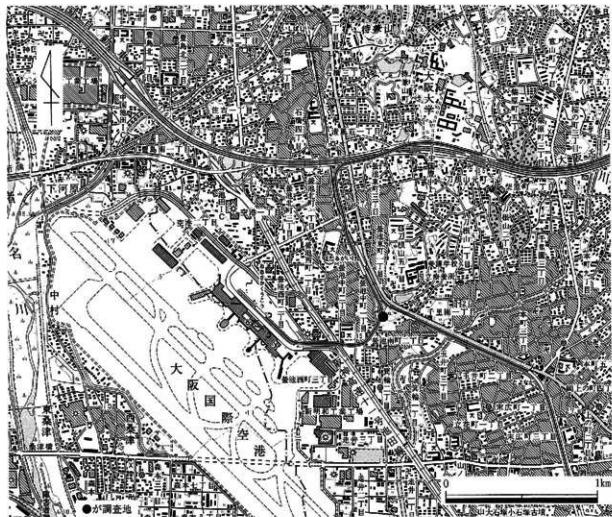


図1 調査位置図

第2章 環境

蛭池遺跡は、大阪北部の豊中市蛭池中町に位置する（図3—14）。現在は、阪急宝塚線蛭池駅を中心とした商業地、住宅地の一角に所在する、古墳時代・奈良時代～中世の遺跡である。蛭池駅は、大阪国際空港開港以来空の玄関口である。地名の蛭池は、駅の開設によって作られた。その駅名の典拠になった蛭ヶ池は、豊中に多い溜池の一つで、駅東方の刀根山地区に位置する。今回の調査地である南門前池もこれら溜池の一つであり、開析谷を利用して作られた。

地理的位置（図2）

蛭池遺跡周辺の地形は、千里丘陵の西端にあたり、遺跡の南と西は河川によって運ばれた土砂の堆積による沖積地が広がる。遺跡周辺の河川は北に箕面川、南東に千里川が流れ、両河川は兵庫県との府県境である猪名川と合流する。

当遺跡は、待兼山丘陵南西部の縁辺部にある。待兼山丘陵には、大阪層群上部が分布し、それを不整合におおように丘陵の縁辺に高位・中位・低位段丘堆積層が広がる。蛭池遺跡は、砂礫で構成する低位段丘堆積層上に立地する。

調査地周辺の既往調査

蛭池遺跡の調査は、主に当センターの大阪モノレール関連の発掘調査が大半を占める。今回の調査地である南門前池は、1992～93年度にモノレール橋脚部分の調査をし、南門前池の東側に位置する箕輪池から続く北東—南西方向の自然流路と、北西—南東方向の奈良時代の溝を検出した。また南門前池の南西側にある大阪国際空港へと通じるモノレール橋脚部分とその周囲の1995～96年度の調査では、埋没段丘崖を確認した。段丘崖直下の浸食痕からは、国府型ナイフ形石器と、瀬戸内技法で製作した際に生じる石核・翼状剥片・チップなど、後期旧石器時代後半頃の遺物が出土した。浸食痕の上面では、古墳時代後期の遺物をともなう西方向、または南西方向に流れる溝がある。報告によると、この古墳時代後期の溝は、池の西側に広がる平地部の耕地拡大によって掘られた灌漑用の溝であるという。

また、池の南側堤防に隣接する地点を、豊中市教育委員会が1995年度に試掘調査し、その結果、南門前池内と同様に北東—南西方向の幅50cm前後、深さ5cm前後の3本の溝と、深さは不明であるが幅約12mの自然流路を検出した。前者の3本の溝は傾斜面を流れる小流路であり、南門前池内の流路とは別支流であるという¹⁾。

池南側堤防の橋脚部分の1995～96年度調査では、地山直上で溝・自然流路を検出し、その上層で近世の遺物を伴う溝と鋤溝を検出した。南門前池の築堤は、江戸時代以降の可能性があるという。

さて、低位段丘上の大阪モノレール関連の調査と、遺跡範囲が蛭池遺跡と一部重なっている麻田藩陣屋跡の1999～2001年度の調査では、後期旧石器時代の国府型ナイフ形石器が出土したほか、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した密集土坑群や、掘立柱建物跡・門跡、正方位を向いた中世の鋤溝・溝や、麻田藩陣屋と同じ方位軸をもつ鋤溝を検出した。また、近世の麻田藩陣屋に伴う建物跡・土坑や屋敷地の溝などが検出され、18～19世紀の陶磁器類が出土した。

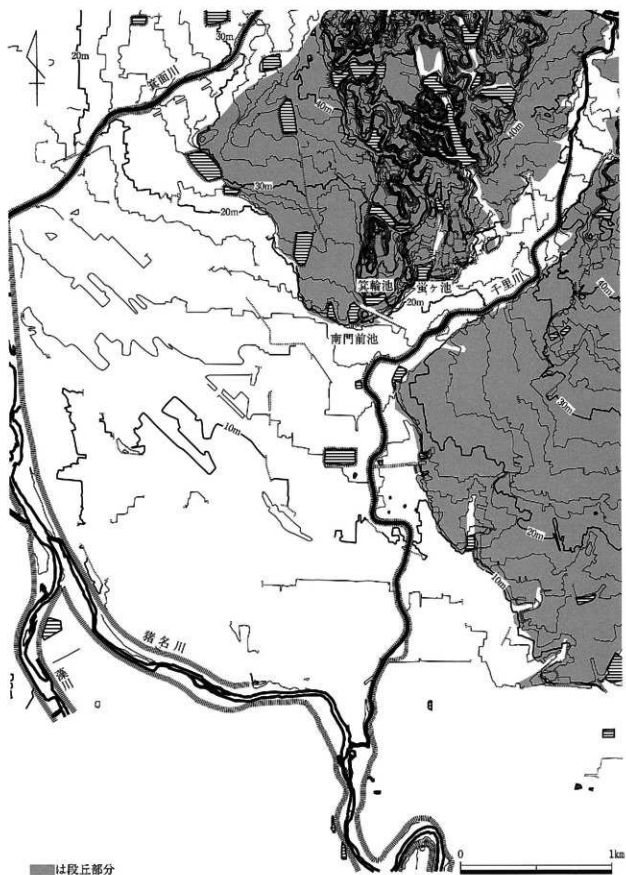


図2 等高線図

歴史的環境（図3）

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代後期と奈良時代が中心であった。そこでここでは、蛭池遺跡（14）周辺における、古墳時代後期から奈良時代にかけての歴史的環境を以下に述べる。

古墳時代から奈良時代に須恵器を焼成した桜井谷窯跡群（3）は、古墳時代後期に生産のピークを迎える。堅穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した古墳時代後期の遺跡は蛭池東遺跡（12）・本町遺跡（28）・新免遺跡（30）・山ノ上遺跡（31）などがある。柴原遺跡（9）・本町遺跡（28）では焼成不良の須恵器が出土し、桜井谷窯跡群（3）と関係がある。

蛭池遺跡（14）周辺の古墳は、南門前池の東に位置し、車輪石と仿製三角縁神獸鏡が出土したという前期の御神山古墳（15）がある。千里川左岸には、同じく前期の大石塚古墳（33）・小石塚古墳（34）や、中期の大塚古墳・御獅子塚古墳を代表とする桜塚古墳群（32）があり、後期になり衰退する。新免遺跡（30）・新免宮山古墳群（27）など後期には小規模な古墳群が分布する。また新免遺跡（30）の南に隣接する山ノ上遺跡（31）では、古墳の周溝と思われる溝から、6世紀前半の多量の埴輪片が出土した。

新免宮山古墳群（27）に隣接する金寺山廃寺（26）からは、四天王寺式軒丸瓦が出土した。地方豪族の古墳造営から寺院建立へと移行した一例であろう。また、南刀根山遺跡（16）では、奈良時代の蔵骨器が出土した。

奈良時代の掘立柱建物跡を検出した遺跡は、柴原遺跡（9）・蛭池北遺跡（11）・曾根遺跡（38）・本町遺跡（28）などがある。蛭池遺跡（14）周辺では、古墳時代後期と同じ場所に集落が営まれた例が多い。特に曾根遺跡（38）は大形建物群があり、官衙関連施設または居館の可能性がある。

註

- 1 豊中市教育委員会橋田正穂氏のご教示による。

参考文献

- 市原実 1993年 『大阪層群』 創元社
大阪府教育委員会 2001年 『大阪府文化財分布図』
(財)大阪府文化財調査研究センター (旧称 (財)大阪文化財センター)
1994年 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・蛭池遺跡・蛭池西遺跡1992・1993年度発掘調査報告書』
1997年a 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田落庫岸跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡1993～1996年度発掘調査報告書』
1997年b 『蛭池遺跡(その3-2)発掘調査報告書』
豊中市教育委員会 1994年 『豊中市埋蔵文化財年報』VOL.2
1998年 『豊中市埋蔵文化財年報』VOL.5 (1995年度版)
1999年 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成10年度 (1998年度)
2003年 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成14年度 (2002年度)
豊中市史編纂委員会 1960年 『豊中市史』史料篇1
1961年 『豊中市史』第1巻
1998年 『新修 豊中市史』第9巻
阪急電鉄株式会社コミュニケーション事業部 2001年 『阪急ステーション』(『阪急ワールド全集』①)
兵庫県教育委員会 2000年 『兵庫県遺跡地図』



- | | | | | |
|-------------------|---------------|-----------|-------------|----------------|
| 1 林田南遺跡 | 16 南乃根山遺跡 | 31 山ノ上遺跡 | 46 北井遺跡 | 61 口西弁事日神社境内遺跡 |
| 2 大神遺跡 | 17 下河原遺跡 | 32 桜塚古墳群 | 47 藤部遺跡 | 62 口西弁鎌名川河原遺跡 |
| 3 板井寺遺跡群 | 18 小坂田遺跡 | 33 大石塚古墳 | 48 藤部東遺跡 | 63 春日神社遺跡 |
| 4 少路遺跡 | 19 皇島南遺跡 | 34 小石塚古墳 | 49 原田遺跡 | 64 田部高田遺跡 |
| 5 武風岡部傳安源氏 板井寺陣壘跡 | 20 住吉宮の前遺跡 | 35 岡町遺跡 | 50 原田城跡(北城) | 65 鎌名川川床遺跡 |
| 6 内田遺跡 | 21 宮の横西遺跡 | 36 岡町之遺跡 | 51 原田跡(南城) | 66 藤田鏡馬寺遺跡 |
| 7 持重山古墳 | 22 宮後町遺跡 | 37 岡町南遺跡 | 52 原田北河遺跡 | 67 御衣遺跡 |
| 8 符重山遺跡 | 23 中村遺跡 | 38 菅原遺跡 | 53 原田中町遺跡 | 68 松原遺跡 |
| 9 藤原遺跡 | 24 大阪空港遺跡A地点 | 39 菅原東遺跡 | 54 西島津遺跡 | 69 口西弁藤川河原遺跡 |
| 10 北乃根山遺跡 | 25 大阪空港遺跡B地点 | 40 菅根地輪壘跡 | 55 藤本遺跡 | 70 鎌名寺廃寺 |
| 11 雲雀北遺跡(宮の前遺跡) | 26 金寺山城寺 | 41 豊島北遺跡 | 56 藤本遺跡 | 71 真砂坊遺跡 |
| 12 東池東遺跡 | 27 新免宮山古墳群 | 42 豊島南遺跡 | 57 岩屋遺跡 | 72 寺前遺跡 |
| 13 麻田宮跡群 | 28 不可遺跡 | 43 安輪東遺跡 | 58 原川野遺跡 | 73 上野橋遺跡 |
| 14 雲谷遺跡 | 29 金寺山城寺塔刹柱礎石 | 44 菅原遺跡 | 59 藤部遺跡 | 74 利賀北遺跡 |
| 15 勇神山古墳 | 30 新免遺跡 | 45 藤部北遺跡 | 60 口西弁遺跡 | |

図3 遺跡分布図

第3章 調査成果

第1節 調査の方法

今回の調査地は南門前池内に位置する(図4)。北東側は御神山古墳が存在する丘陵裾を含むものの、それ以外の場所では大量のヘドロが堆積していると十分予想できた。発掘調査を実施するに際しては、重機によるヘドロ掘削・積み上げをよりスムーズに実施するために、セメント系固化剤を用いて土壌改良を行った。これらヘドロ層を除去すると、地山面が露出したので早速遺構検出・遺構掘削にかかった。なお掘削土仮置きおよびレッカーによる航空測量の都合上、調査区を2分(北半を1区・南半を2区とする)して調査を実施した。

調査地平面図作成にはレッカーによる航空測量を実施したが、調査地上を走るモノレール軌道に制約され、通常よりはるか低空からの撮影を余儀なくされた。

第2節 基本層序

池内のヘドロ層は大きく上層・下層にわかれる(図5)。上層の黒褐色粘土層(1層)の大半は土壌改良を施したが、改良を免れたヘドロ層もある。最浅部で0.2m・最深部で1m堆積しており、現代の瓶・缶などを包含する。

この黒褐色粘土層の直下には灰色粘土層(2層)が調査地北端で0.1m・南端では1m堆積する。1区ではわずかに堆積する本層を人力掘削の対象としたが、黒色粘土層と連続して堆積し、出土遺物が近世以降に限定されることから、2区では機械掘削を施した。

近世以降現代にいたるまで堆積したヘドロ層を除去すると、調査地の大半では無遺物層となる。しかし調査地西端では、次節で改めて述べるように、この南門前池の基礎となった開析谷のほぼ中央を南流する流路を検出し、そこでは最大1m前後の土砂が堆積していた。この流路を埋め尽くす埋土から、古墳時代から中世にいたる土器片が、微量ながら出土した。

第3節 遺構

今回の調査で検出した遺構は、1992年度モノレール橋脚建設に伴う調査で確認した溝の延長部分のみである(図6)。今回この溝は橋脚北西側で2条だったものが1条にまとまり、南東方向へ流れることが判明した(1溝)。また先の調査では、出土遺物からこの溝を奈良時代の所産としていたが、今回新たに瓦器が出土したことにより、中世まで下る溝であることが明らかとなった。

なお人為的な遺構ではないが、調査区西端に沿うように自然流路を検出した(2自然流路)。開析谷中央を南流するが、調査地北半部分では流路を著しく拡散し、河南端付近ではわずかながら蛇行する。

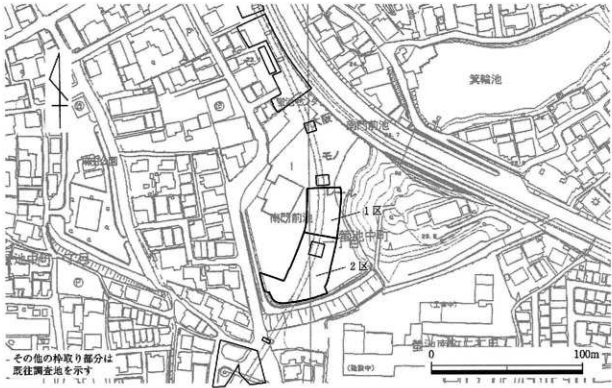


図4 調査区割図

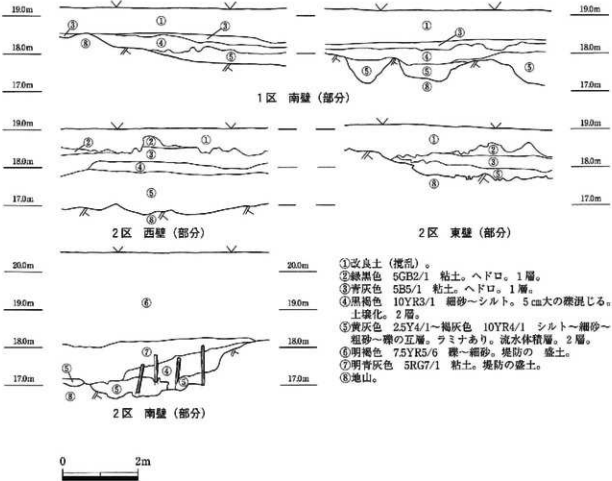
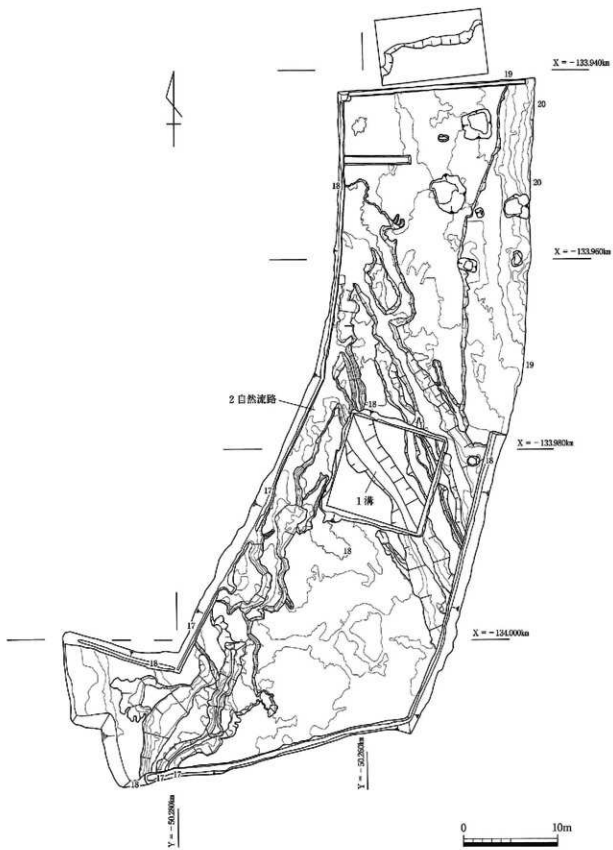


図5 土層断面図



数字は標高 (単位はm)

図6 遺構配置図

第4節 遺物

本調査の出土遺物は主に古墳時代後期と奈良時代の須恵器であり、他に平瓦と円筒埴輪が出土した。

1～4は青灰色粘土層出土遺物で、麻田藩陣屋跡でも出土している19世紀代の遺物が出土した。1は19世紀前～中頃の匣鉢である。2は19世紀の肥前染付磁器広東碗である。3・4は18世紀後～19世紀代の陶器灯明皿である。ロクロ成形で、内面に透明釉を施し、外面底部には右回転糸切り痕がある。

5～11は調査区西端の流路から出土し、8は流路内の攪乱で出土した。5～8は奈良時代の須恵器である。5は把手付甕、6は壺蓋、7は杯蓋であり、8は壺の底部である。9は川西編年V期の円筒埴輪底部である。外面は一次調整のタテハケのみで、内面はナデ調整。焼成時のひずみが激しい。10は須恵器壺A類で、平城宮編年のI期。11は須恵器壺。木下編年のII型式4段階に相当する。

12～17は、調査区南西隅の黒褐色砂質土層から出土した。遺物の年代は奈良時代に集中する。12は土師器鍋か。13は須恵器壺G類で、平城宮編年のII期に相当する。14・15は須恵器杯。16は土師器皿である。17は平瓦である。凸面に格子叩き痕、凹面に布目痕があり、凸面側縁に面取りがある。

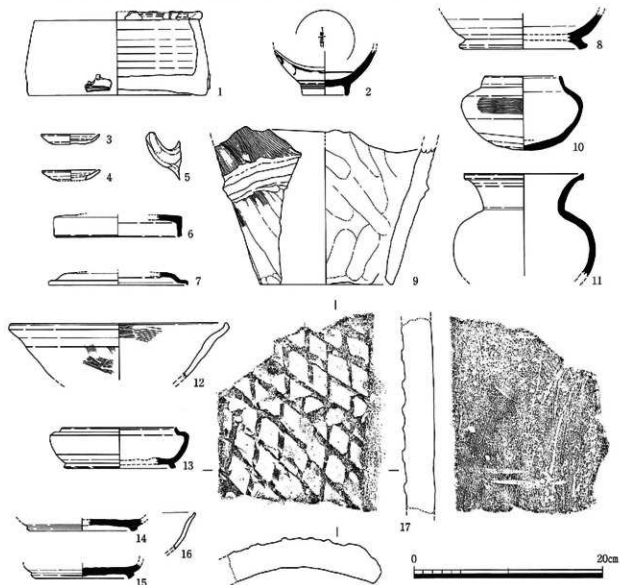


図7 出土遺物実測図

第4章 まとめ

1992年に始まった都市計画道路大阪モノレール整備事業に伴う発掘調査は、これまで榮原～大阪国際空港間において豊中市宮の前遺跡・蜷池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蜷池遺跡・蜷池西遺跡・蜷池南地区で実施してきた。これらの調査を経て1997年8月、大阪高速鉄道株式会社による大阪モノレールは大阪国際空港～門真市間全線開通し、1998年4月イギリスギネス出版社から「モノレール営業距離世界一」の認定を受けるにいたった。今回の調査は、軌道法の適用を受けたモノレール直下の道路整備に伴う事業として実施した。

さて本調査地は、第2章でも触れたように刀根山丘陵西側に広がる低位段丘と、猪名川・千里川水系が形成した沖積平野との境界付近に位置する。調査地東側には、古くから仿製三角緑神獸鏡や石製腕飾類の出土地として知られる御神山古墳があり、調査地北西の低位段丘上では1997年の調査で、古墳時代後期を中心とする密集土坑群や奈良時代の掘立柱建物を検出している。

調査の結果、1992年度調査で奈良時代の溝と報告した溝の延長部分と、池中央を南流する自然流路を検出するとどまり、古墳時代・奈良時代の須恵器・土師器、古墳時代の埴輪、奈良時代の平瓦、鎌倉時代の瓦器など、数十片の遺物が出土した。かような遺構・遺物の少なさは、土石流の痕跡かとも思える自然流路が、生活空間として利用されていた一帯の痕跡を全て洗い流してしまったことに起因するのではない。むしろ当地が、南門前池という開析谷末端を堰き止めて築造された池内ということからも明らかのように、居住には不向きな地形であったためだ。なお、調査地は少なくとも鎌倉時代まで開析谷を呈していたが、ヘドロ（灰色粘土層）出土遺物からみて、遅くとも19世紀代には谷を堰き止めた池が存在したと考えてよい。

しかし、僅少な出土遺物には示唆に富むものがあつた。まず、自然流路から出土した円筒埴輪片。『豊中市史』によれば、御神山古墳から埴輪が出土したことをうかがわせるような記載があり、調査地北半は同古墳に隣接するにも関わらず、それに伴うであろう埴輪は出土しなかった。自然流路出土の円筒埴輪は、古墳時代前期に築造された御神山古墳よりかなりの後出資料である。蜷池遺跡周辺では初出資料となるこの埴輪片は、近隣ですでに削平され地表に痕跡をとどめない中小規模古墳の存在を暗示するのみならず、調査地北西に広がるほぼ同時期の土墳墓群とも想定される密集土坑群とともに墓域を形成していた可能性をも示唆する。

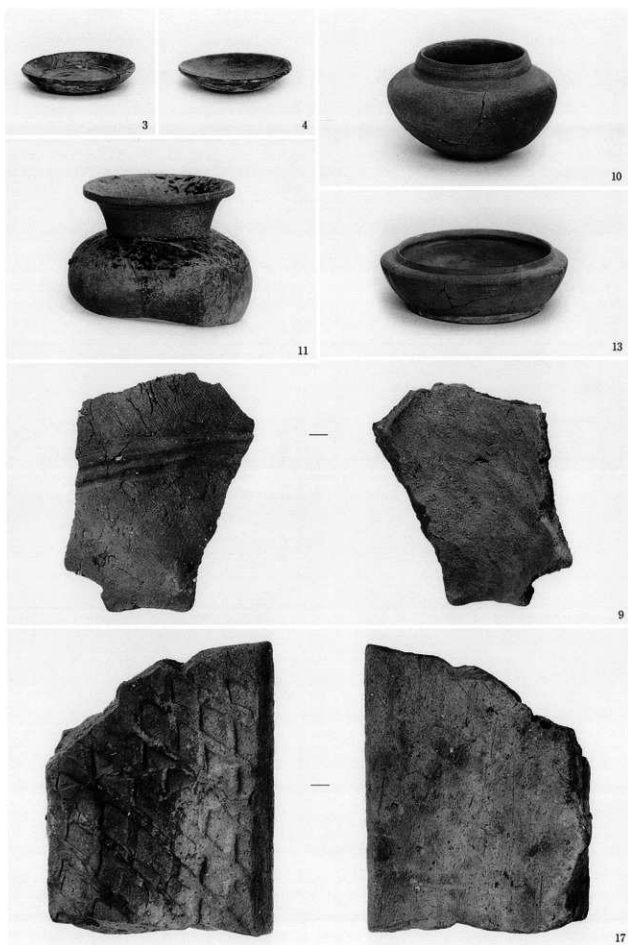
次に、調査地南西端で比較的まとまって出土した奈良時代の土器。今回の調査では、遺物はかなり散漫な状態で出土したが、調査地西南隅の自然流路付近で量は少ないながらも奈良時代の遺物がまとまってみつかった。土器とともに調査地西端の地山を構成する円礫が出土したことから、これらの土器は北から流されてきたのではなく、西側から転落した可能性が高い。つまり調査地西南端に隣接して、奈良時代の集落の存在を裏付ける手がかりを得たのである。

さらに、この土器とともに出土した一枚作りと思しき厚手の平瓦片。この平瓦の凸面には大ぶりな斜格子叩き、凹面にはわずかに布目瓦痕と縦方向のヘラケズリ痕が残る。平瓦1点ではあるが、格子叩きの形状は金寺山廃寺所用平瓦とは異なり、ほとんど磨耗していないことから、上記奈良時代の集落内に瓦葺施設（仏堂か？）があつたのかもしれない。

圖 版



(上) 1区全景 (南東から) (下) 2区全景 (北西から)



10

11

13

9

17

報告書抄録

ふりがな	ほたるがいのせき						
書名	蛭池遺跡02-1						
副書名	都市計画道路蛭池西側線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第105集						
編著者名	辻本 武・駒井正明・永井異子						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0106 大阪府堺市竹城台3丁目番4号 Tel.072-299-8791						
発行年月日	西暦2003年10月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ほたるがいのせき 蛭池遺跡	おおさかふし とよなかし 大阪府豊中市 ほたるがいのせきまち1ちようめ 蛭池中町1丁目	27203	57	北緯 34° 47' 28" 東経 135° 27' 03"	2003. 2. 7~ 2003. 7. 31	1596㎡	都市計画道路蛭池西 側線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
蛭池遺跡	集落	古墳時代	溝	須恵器・円筒埴輪			
	集落	奈良時代		須恵器・土師器・瓦			
	集落	鎌倉時代		瓦器			

(財) 大阪府文化財センター発掘調査報告書 第105集

蛍池遺跡02-1

都市計画道路蛍池西側線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2003年10月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
堺市竹城台3丁目4番4号

印刷・製本 / 株中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号